

Pynson 版『ジョン・マンデヴィルの旅』について

中 野 好

(受付 2006年11月1日)

『ジョン・マンデヴィルの旅』は、ヨーロッパ、近東、アジアへ旅した男の一人称による物語で1357年頃にフランス語で書かれたと考えられている。物語の内容はイングランドよりコンスタンティノープルへの道、エルサレムのこと、死海とヨルダン川の話、インド周辺の島々のこと、大ハーンについての記述、プレスター・ジョンの王国、鳥葬についてと多岐にわたっている。また、荒唐無稽な話も随所に見られる。

最初の英語の散文訳はエジプトに関する記述に欠落があるため、Defective Version (欠損版) と呼ばれるがその写本はすべて15世紀のものである。これらの写本は Seymour によると5つの subgroup に分類され、Pynson が印刷した写本は subgroup 2に属するもので現在は失われている。

John Mandeuyle はイングランドの saynt Albone で生まれ、1332年ミカエル祭の日(9月29日)に母国を出発したと a3r10行以降に次のように記述されている：

John Maundeuyle knyght. Thoughe it so be that I be nat worthy that was brone in englonde in the towne of saynt Albone and passed the see in the yere of the Incarnacion of oure lorde iesu crist M. CCCxxxii on the day of saynt Myghell

この物語を Pynson がはじめて印刷した年は1496年と考えられている。その後、Wynkyn De Worde 等により印刷・再版が繰り返されことから、Pynson 版の持つ意味は大きい。

活字について

Pynson 版テキストに用いられる活字は Black Letter と呼ばれるもので、次のようなものがある。以下図に示された例はすべて *The Travels of Sir John Mandeville: Facsimile of Pynson's Edition of 1496*. Introd. M. C. Seymour. Exeter, 1980. からのものである。

1. 活字 A, a

新しいパラグラフを示す large initial として2行分の高さの A が3回 (b4v 3, d2r18, e4v24) 使われている。大文字用活字は2種類あるがその使用環境に規則性は見られない。小文字用の活字は磨耗によるものか擦れの目立つものもあるが基本的には単純な形のものでいわゆる2層の a は使用されて

アルファベット活字

- | | | | |
|-----|----------|-------|-------------------|
| 1. | A | A A | a a a a a a a |
| 2. | | B B | B |
| 3. | | C C | c c |
| 4. | | D D | d d D D |
| 5. | | E E | e e e ①e ②E ③ē |
| 6. | F | f | f f |
| 7. | | G | g |
| 8. | | H H H | ①h h h ②H ③h |
| 9. | I | I I I | i i |
| 10. | | J | j |
| 11. | | K | ①k ②K K E K |
| 12. | | L L | ①l ②L |
| 13. | N | N | ①n ②N |
| 14. | | O | o ①O |
| 15. | | P P | p ①P |
| 16. | | Q | q |
| 17. | | R R | ①r ②R ③i ④i ⑤P |
| 18. | | S S | ①s ②f ③ff ff ④R R |
| 19. | | T T T | t t |
| 20. | | U | u ũ |
| 21. | | V | v v |
| 22. | W | W | w w |
| 23. | | X | x ①X ②X |

その他の活字

24. ①b ②w^t ③r ④/ ⑤/ C : .

図1 活字の種類

いない。

2. 活字 B, b

大文字用活字は2種類あるが、その用法に規則性は見られない。小文字用の活字は1種類である。

3. 活字 C, c

大文字用活字は角ばった活字と丸みを帯びた活字の2種類ある。小文字用活字は幅の広いものと狭いものの2種類が使用されている。

4. 活字 D, d

大文字用活字は1種類である。小文字用は back 部分が鮮明で幾分長いものと、同部分が短いものが使われている。また、使用頻度は少ないが飾りのついた活字が e4v21 englund, e7v18 enuyrond に使われ、背の部分が極端に短く、lobe 部分が角ばった活字が b5v25 and で使われている。

5. 活字 E, e

大文字用活字は2種類ある。小文字用は図に示したように複数の形があるが、その使用環境に規則性は見られない。他の活字に比べ使用頻度が極端に高い小文字 e 用活字は磨耗のためか①、②のように eye 部分に欠損がある活字も使われている。

6. 活字 F, f

3行分の高さの large initial が7回 (a2r1, b8v19, d7v5, elr22, e8r7, f7r28, h3r20) 使用されている。大文字用活字は1種類である。小文字用活字は shaft の下の部分が直線的なものと、わずかに左にカーブしているものの2種類あるが、その使用環境に規則性は見られない。

7. 活字 G, g

大文字用活字、小文字用活字とも1種類の活字が使われている。

8. 活字 H, h

大文字用活字は2種類ある。小文字用活字は大別して下の部分が開いたもの①と、閉じたもの②、③の2種類ある。閉じた活字のうち縦線が太く鮮明な活字③は e4v12 their と they にしか使われていない。

9. 活字 I, i

2行分の高さの large initial が1度 (a3v4) 使われている。大文字用活字は大別して2種類あるが、より単純な形の活字には下の部分が欠損のためか短いものがある。小文字用活字は点が鮮明なものと、不鮮明で点の有無がはっきりしないものの2種類あるが、その使用環境に規則性は見られない。

10. 活字 K, k

大文字用・小文字用とも1種類の活字が使われている。

11. 活字 L, l

大文字用活字は1種類である。小文字用活字の使用環境には規則性がある。すなわち、“land”や“children”のように single l の場合と“called”や“specially”のように語中の double l の場合は①が使われる。しかし、“shall”や“well”のように double l で語が終わる場合は②のいずれかが使われる。

12. 活字 M, m

大文字用活字は2種類ある。小文字用活字も2種類あり、それらの使用環境には規則性が見られる。①は語尾で使われ、それ以外で使われることはない。一方、②が語尾で使われた例は8例 (adam b6v16, Ierusalem c2v9, whom c3r11, flom d1r10, d8r15, Abraham d2v27, Flom d5r5 comom f4v2) に過ぎず、たいていは語頭あるいは語中に使われている。

13. 活字 N, n

2ないし3行分の高さの large initial が7回 (b5v6, d6r14, d7r1, d8r21, g4r19, g8r28, h1r23) 使

用されている。大文字用活字は1種類である。小文字用活字は擦れ等で不鮮明なものを除くと2種類あり、それらの使用環境には規則性が見られる。すなわち、①は語尾で使われ、それ以外の場所で用いられることはない。一方②は語頭・語中で使われることが多い。しかし、この活字が語尾で使われた例が47例あり、特定のページに集中している。b6rでは23行目以降6例ある語尾nを持つ語全てでこの活字が使われている。さらに、f2rでは21行目以降8例、g3rでは20行目以降9例、いずれも全てで②が使われている。

14. 活字 O, o

大文字用・小文字用活字とも1種類である。小文字用活字には上部に線の付いた活字①がある。これはその活字の次の文字を省略する際に用いられるものであり写本で採用される方法と同じである。

15. 活字 P, p

大文字用活字は2種類ある。小文字用は1種類で、②は次の文字を省略する際に用いられるもので写本で採用される方法と同じである。

16. 活字 Q, q

大文字用・小文字用とも活字は1種類である。

17. 活字 R, r

大文字用活字は2種類ある。小文字用活字は大別して2種類あり、それぞれの使用環境には写本の場合と同様の規則性がある。いわゆる①の round r は右に縦画を持つ文字 b, d, o, p などの次に使われ、特に o のあとで使われることが多い。それ以外の場所では普通の②が使われる。しかしこの原則が守られていない例も少数ながら存在し、特に行末で②の代わりに①が使われることが多い (c7r19 other, d5v28 vnder, e3r21 other, g7r4 ouer, h5v19 our, h5v26 mayster)。r の shoulder 部分に欠損があるため、一見小文字の i に見える③は、下の部分が鋭角に突き出ている点で i と区別できる。次の e を省略する際は④と⑤の活字が使われが、⑤の使用例は1例に過ぎない (b2r28 manere)。

18. 活字 S, s

大文字用活字は2種類ある。小文字用も2種類あり、それぞれの使用環境は写本と同様の規則性が見られる。いわゆる、①の round s は語尾で使われ、それ以外の場所では②の long s が使用される。例えば、“fresshe” や “crosse” のような double s の場合は③が使われ、2番目の s が直線的な活字もあるが、使用法に規則性はない。s と t が連続する場合④の活字が使われる。f の場合と同様、shaft 部分が直線的なものとならずかに左にカーブするものと2種類あるが、その使用環境に規則性は見られない。

19. 活字 T, t

大文字用活字は3種類あるが、使用環境に規則性は見られない。小文字用には横棒の部分が鮮明に右に突き出ているものと、横棒の存在が不鮮明な活字が使われているが、使用環境に規則性は見られない。

20. 活字 u

大文字用活字の使用例はない。小文字用は基本的には1種類である。写本の場合と同様に省略を示す横棒を上部に付けた活字も使われている。

21. 活字 V, v

大文字用活字は1種類である。小文字用は2種類認められるが、使用環境に規則性は見られない。

22. 活字 W, w

3行分の高さの large initial が2回 (b3v3, f8v1) 使われている。大文字用活字は1種類である。小文字用は幅の広さに違いのある2種類認められる。

23. 活字 x, y, z

これらが大文字で使われた例はない。x と z の活字は 1 種類である。使用環境に規則性は認められないものの y 用には上部が鮮明に分かれている①と、そうでない②の 2 種類の活字が見られる。

24. その他の活字

①, ②, ③はそれぞれ “that”, “with”, “and” を示すもので、写本にも使われる。

Pynson 版テキストのレイアウト

印刷スペースは150×90mm であり、1ページあたり30行印刷されているが、f2r, h4r, i4r と i6v は29行、i6r は27行と少ない。また、a8, c1と c8は失われている。

新しいパラグラフの行頭をインデントする現代の書式とは違い、行頭は上下一直線にそろえられている。また、行末は以下の方法で極力そろえようとしている。

現代のハイフンに相当すると考えられる “//” や “/” (図 1 24. ④, ⑤参照) を用いて語を区切る方法が採用されている。一文字が入るに十分はスペースがある場合 “//” を、スペースが十分に取れない場合には “/” を用いる傾向が強いが、なんら記号を用いず語を分割することもある。

語を分割する際は、次行に送られる文字列に母音字を含める場合が多い。現代では一音節のため区切ることのない “made”, “those”, “same”, “more” など場合によっては区切られることがある。

行末をそろえる別の方法として、文字を繰り返すことがある。行末か行末の 1～2 語前の語の o を繰り返す (例えば to を too にする) ことがある。このような例は38例ある。

エラーについて

中世の手書き写本には以前指摘したとおり scribe による誤写・誤記が見られる。また、現代の書籍にも誤植を発見することがある。

Two others were associated with Caxton, Robert Pynson and Robert Copland, who both set up their own presses (The Cambridge History of the English Language vol. III, p. 24)

ここで述べられている Robert Pynson は同書の他の箇所にある Pynson に関する記述からすると、Richard Pynson である。この書籍は原稿を見ながら植字工が活字をひとつひとつ植字棒に詰めてから印刷する15世紀の印刷方式を用いて印刷されたものとは考えにくい。このことから原稿の段階ですでに名前の取り違えがあった可能性が高い。

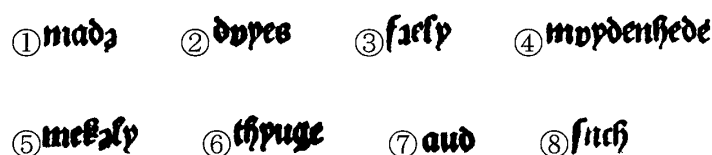


図 2 上下逆印刷の例

① *tere* ② *her.e* ③ *wyph* ④ *tehy* ⑤ *whyys thy*

図3 植字順の乱れ

Pynson 版のテキストにも多くのエラーがある。明らかに植字工が犯したエラーと写本にも同様のエラーが存在することから写本にも原因の一端がありそうなものと2種類ある。

写本を見ながら植字棒に活字をひとつひとつ詰めていく過程で活字が上下逆に詰められ印刷された例が少数ながら存在する：① a4v26, ② e5v24, ③ e8v15, ④ i2r27, ⑤ i4v14, ⑥ i6v2, ⑦ b1r5, ⑧ a2v13に見える(図2)。⑦の“aud”の例は b1r16, c7r2, d3r15, e6v25, h4r18にも見える。

また、植字中に活字の順番を取り違えた例もある(図3)。正しくは①：“tree” ②：here. ③：wyth, ④：they ⑤：why thys である。さらに、次のようにまったく別の活字が植字されたエラーもある：a6r26 wyich (正しくは which), b2v18 af (of), b6v23 pararise (paradise), b8v5 it ts (it is), c2r19 therfpre (therefore), c6r21 tn o (into), d5r5 Iardon (Iordan), e1v16 korne (borne), e2v28 gaspellys (gospellys), e5r6-7 Nyke (Nyle), e7r26-7 lordspyp (lordshyp), f2v27 An (In), f3r6 reoson (reason), f7v26 ta (to), f8r29 Iy (In), g6r8 de (he), i4r18 lyuygge (lyuynge), k1r14 Tangeras (Gangeras)。

次に見るエラーは写本にも同様の間違いが存在することからエラーの犯人が植字工か写本の写字生か判断がつかないものである。

写本に見られる重複誤写の例が Pynson 版テキストにも見られる：e2v30- e3r1 that the | that the (正しくは that the), e8v15 withouthouten (without), h3r25 his his (his), h5v30- h6r1 of | of (of)。また、パンクチュエーションの重複も見られる：b4r11, d3r17, d5v13, e1r15。

文字の形が似ていることによる誤写は写字生を問わず多くの写本に存在するエラーであるが Pynson 版テキストにも同様のエラーがある。f と long s の取り違えが1例ある：b8r1 Encenfe (encense)。c と e が取り違えられた例がある：e8v16 vcrtue (vertue)。t と c の取り違えが、b8v1-2 bro | cher (brother), e2v22 chey (they), k3v29-30 parcerers (partyners) に、t と r の取り違えが、e1r28 orher (other) に見られる。

写本によくある minim 関連のエラーが Pynson 版テキストにも多数ある。n と u の取り違えが次の箇所に見える：b8v29, d1r11 Inde, Indee (Iude, Iudee), d3v23 uorysshed (norischid), e7r8 ysau (Isau), e7v16 sonde (soude), f3v12 vynere (veuer), f4v18 Iana (Iaua), f8v5 pegmaus (Pegmans)。

また、minim の本数が取り違えられた例と minim の区切りに問題がある例がある。本来1本の minim が2本に取り違えられた例が d5r16 crnstened (crystenede) にある。また、次は minim の本数は正確だが区切り方に問題のある例である：a4r11 Iustiman (Iustynyan), e5r8 Ffnes (Fimes), h5r30 Cormlyn (cornilyn)。はじめの例は4本の minim を“ini”と区切るべきところ“im”と区切っている。次の例は“nn”としたため母音がない。最後の例では3本の minim を“ni”と区切るべきところ“m”としている。

写字生の不注意が原因かそれとも exemplar を忠実に写し取るという写字生の態度によるものか不明であるが、写本には文字の脱落が見られる。同様の脱落が Pynson 版テキストにも次のように存在する：b7v5 chuche (churche), c5v3 righwysly (rightwysly), d3v13 ths (this), d6r10 Preter (Prester), flr29 hlde (holde), f7r21 the (they), h2r11 oter (other), h5r28 cystall (crystall)。

次の例はおそらく文字の省略を示す符号を写字生が書き忘れたか、植字工が見落としたかによるも

のであろう：d11r24 vegeaunce (vengeaunce), f4r8 coutre (countre), h1v13 wyldnes (wyldernes).

本来は無声音の文字が有声化し、別の文字で書かれる例が写本に存在する。同類の例が Pynson 版テキストにも少数ながら存在する：a4r26-7, d3r15, d7v16-7 Constantynoble (Constantynople), h2r26 gaspy (Caspay). また、逆に本来の有声音が無声音化した例もある：k1r13 Canges (Ganges).

以上は写本にも同様のエラーが存在することからある程度修正が可能なものであるが、次のように文意にかかわるエラーも Pynson 版テキストに存在する。

- (1) there make they a greate fest euery yere as he | Were a saynt and open hys auter they hold their great | counseylis and assembles (a7r1-3)
- (2) for at the fote of mounte synay is a fayre castell & stronge (c7r20-1)
- (3) Also a polre mans sons woke the a tyme (e6r11-2)
- (4) bytwene simulacres and ydols is no difference (f1v13)

これらの例には綴り上の間違いはないが、このままでは意味が通らない。(1)の“open”はおそらく“vpon”のエラーであろう。実際 Seymour (2002) では“vpon”である。(2)の“synay”は“syon”の取り違えである。(3)は“the”と“a”の間に脱落—Seymour では“hauk”が入る—がある。また、(4)の“no difference”は Seymour では“a grete difference”となっていて、意味が逆になる。

このように、単純なエラーからかなり複雑なエラーが Pynson 版テキストには存在しているが、校正者がいたなら活字の上下が逆に印刷されたり、活字の順番に乱れが生じるなどの単純なエラーはかなり減っていたのではないだろうか。

このようなエラーはあるが、おそらく1496年に印刷されたと考えられる『Pynson 版マンデヴィル旅行記』は、その後の『マンデヴィル旅行記』の出版に多大な影響を与えたと考えられる。

REFERENCES

Lass, Roger, ed. *The Cambridge History of the English Language*, Vol. III : 1476-1776. Cambridge : Cambridge University Press, 1999.

中野 好「写本の誤写と校訂本の誤植」岩手医科大学教養部年報第36号 (2001), pp. 119-131.

Seymour, M. C., *The Travels of Sir John Mandeville. Facsimile of Pynson's Edition of 1496*. Exeter Medieval English Texts and Studies. Exeter : Exeter University Press, 1980.

Seymour, M. C., ed. *The Defective Version of Mandeville's Travels*. EETS o.s. 319. Oxford : Oxford University Press, 2002.